

大阪樟蔭女子大学における初年次教育改革の方向性と課題(Ⅱ)

—— 二大学の視察から何を学ぶべきか ——

小 森 道 彦
藤 澤 良 行
福 田 敦 志
白 川 哲 郎

要旨

近年の大学進学率の上昇や入学者層の変化などにより、大学での学習に適応できない学生の数が増えている。大学は、このような学生に入学時から大学での学習の適切な方向づけやモチベーションを与えなくてはならない。それには、一体どういう方法や視点が必要なのか。

本稿は、大阪樟蔭女子大学の有志団体Fプロジェクトの活動のうち、2006年12月の金沢工業大学・沖縄国際大学の視察とその検討を通して、本学での初年次教育の可能性を探るものである。

視察に訪れた両大学とも、その取り組みは文部科学省の「特色GP」に採択されている。とくに金沢工業大学は、初年次教育への取り組みの完成度とその実施を組織的に徹底している点に特徴がある。他方、沖縄国際大学は初年次教育のプログラムの完成度の高さもさることながら、それが沖縄という地域性や文化に深く根ざしている点が注目される。

本稿では、成功例に挙げられる両大学の視察から本学が学ぶべき点として、グループ学習の導入、授業外での学びにつながるプログラムの推進、初年次教育の「核」となる科目を中心としたカリキュラムの見直しなどの提言を行った。

1. はじめに

本稿は、白川他(2007)に引き続き、大阪樟蔭女子大学(以下、本学)の有志団体Fプロジェクト(以下「Fプロ」)の活動のうち、2006年12月に行った他大学視察の検討を通して本学での初年次教育の可能性を探るものである。

白川他(2007)では、初年次教育を目的として2001年度より本学でスタートした「基礎ゼミ」について、白川の取り組みを参与観察し検討することで、1年生を対象とする基礎ゼミの授業運営に何が必要かを考察した。その結果、(a)学生の居場所をつくること、(b)日本語の単純な読み・書きではなく学生が知的充実感をもてる日本語教育であること、(c)学生たちが自分の問題として考えを進められる統一テーマを設定することが重要であることなどを明確にした。

白川の「基礎ゼミ A」の授業は、日本語のトレーニングを含めた個別の授業科目としては、当初の基礎ゼミ構想に沿った事例であると結論づけることができる。さらに、次のステップを考える上で、これらの検討結果は広く大学全体の初年次教育構想とつながるべきものでなくてはならない。

一般に「初年次教育」ということで何が想定されているのか。目的・内容・方法の3点から、上で述べた(a)～(c)との関連も含め簡単に述べる。

文部科学省「平成 19 年度学校基本調査速報」¹⁾によると、大学・短期大学進学率（過年度高卒者等を含む）は 53.7%で過去最高値であることが示されている。大学進学率の上昇は 18 歳人口の減少と相俟って、高学力の学生だけでなく多様な学習履歴をもつ学生が大学に入学することを意味する。また学習者層の問題だけではなく、「ゆとり教育」の弊害である「学力低下」が大学での学習に適応できない多くの学生を生みつつある。このような学生を、1 年生の段階で一から大学に適応させ、大学での学習の方向づけやモチベーションを与えることを目的として日本でも初年次教育の重要性が指摘されるようになった。²⁾

次に、初年次教育の内容については、日本語表現法、ノートのとおり方・レポートの作成法、プレゼンテーションの方法、図書館の使い方、情報検索法、対人コミュニケーションなど非常に多岐にわたる。これらは大きく分けて、おもに基本的な学習スキルにかかわる内容と社会適応力をもたせる内容の二つに分けることができる。（山田（2007）で表示されている初年次教育の目的としての「社会適応」「学習適応」「両方」という分類にほぼ対応する。）

日本語表現力育成が、基本的な学習スキル習得であると同時に社会への適応を目指すものでもあるように、ここでの「学習スキル」と「社会適応力」はコインの表裏である。例えば、白川実践で明確にした「学生の居場所づくり」という要素は、教授者が授業内で受講者間の関係を保障し授業に適応させる、すなわち社会適応力を身につけさせるためのものである。しかし居場所づくりは多くの学生とともに学習スキルを習得するプロセスを通して可能なことであり、それを単独では行うことはできない。逆に「知的充実感のある日本語教育」という学習スキルにかかわる要素は、各自が授業の場に適応し居場所が定まることが背景として必要である。つまり、基本的学習スキルと社会適応力の習得は、授業の場面では同時並行的で不可分なものである。

最後に方法論については、初年次教育には教授者中心の視点ではなく、学習者中心の視点をもって行うことが必要だとされる。「講義から体験型の授業へ」「受験勉強から大学の勉強へ」また「少人数クラス制」などのスローガンも教授者中心から学習者中心へ発想の転換を求めるものである。冒頭で学生が自分のこととして考えられる「統一テーマの設定」の重要性を述べたように、テーマを学習者の興味や学習レベルにできるだけ合わせ、教師が教え込むというよりは学習者に発見させることで興味を引き出す方法論は、学習者のモチベーションを保つという点でとくに初年次教育には大切な要素であると思われる。³⁾

このように、初年次教育は学生を学習面、社会面の両方において学生を 1 年生の早い段階で大学に適応させ、4 年間の大学教育への学習意欲を喚起するためのものである。では、初年次教育プログラムを導入し実現する上で何が必要か。それは、初年次教育の目的と内容の明確化、目的

に沿った有機的・体系的な科目構成と方法論の徹底、そしてその組織的な実践である。しかし、多くの大学教員が学生の質の変化にとまどい、また、基本的な学習技術や社会適応力の育成を大学教育として重要視することに抵抗がある状況で、全学的にコンセンサスを得て初年次教育を実施するのはどの大学でも困難であり、本学もその例外ではないであろう。

しかし、多くの大学が苦慮するなかで、いくつかのまれな成功例も存在する。Fプロでは、初年次教育に関するテーマで文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に採択された大学のうち、特に次の二校に注目した。

まず第一は、金沢工業大学である。この大学は平成 18 年度特色 GP「学ぶ意欲を引き出すための教育実践-KIT ポートフォリオシステムを活用した目標づくり」で選定されている。金沢工業大学は『大学ランキング 2008 年版』（朝日新聞出版社）など、大学ランキングで上位を占めることが非常に多い。例えば、2006 年 2 月号の『読売ウィークリー』「286 大学教育力ランキング」という特集記事でも大きく取り上げられ、「教育付加価値日本一の大学」「自ら行動する技術者の育成」「夢考房」など、この大学を語る上で重要なキーワードで語られている。

また、2007 年 7 月 23 日付『朝日新聞』に「学生への面倒見がよい大学」として、2 位の名古屋商科大学を大きく引き離して 1 位を獲得している。⁴⁾ 記事には「欠席・遅刻の状況からアルバイトの日程まで週一回のパソコン」入力を義務づけ、また「学生たちは、自ら学ぶ姿勢を自然に身につけるといふ」という記述がある。特色 GP にも採択された「KIT ポートフォリオシステム」の運用も含め、大学ランキング上でこれだけの高い数値を得るためにどのような学内組織で運用されているのだろうか。

もう一つは沖縄国際大学である。この大学は「教科教育法を主軸にした体系的教育実習指導-教職課程科目の体系的・段階的配列と模擬授業指導を中心とした取組」で平成 17 年度「特色 GP」に採択された。この大学の特徴は、特色 GP の「採択取組の概要および採択理由」に、沖縄県教員候補者選考試験において合格者の 3～4 割を恒常的に占めるとあるように、沖縄県の教員採用試験の合格率が非常に高いことである。

表 1 二大学の概要（データは 2006 年度のもの）

	金沢工業大学 http://www.kanazawa-it.ac.jp/	沖縄国際大学 http://www.okiu.ac.jp/
学部構成	工学部、環境・建築、情報フロンティア、大学院	法、経済、産業情報、総合文化学部 (日本文化、英米言語文化学科、社会文化学科、人間福祉学科)
学 生 数	6,892 名 (平成 18 年度入学生 1,814 名のうち女子は 126 名)	5,703 名 (男子 2,865 名、女子 2,838 名)
教職員数	教員 325 名、職員 233 名	教員 447 名、職員 91 名
そ の 他	「夢考房」の学生プロジェクト	キャンパスが普天間基地に隣接 米軍ヘリ墜落事件 (2004. 8. 13.)

詳細な報告と検討に入る前に、各大学のデータを比較しよう。学生数はともに5,000～6,000人、学部構成は、金沢工業大学は工学部中心、一方、沖縄国際大学は文科系総合大学である。学生の男女比は沖縄国際大学がほぼ均等であるのに対して、金沢工業大学は平成18年度入学生約1,800人のうち、女子は120名程度でほとんどが男子である。学生数に対する教員数は沖縄国際大学のほうがやや多いが、驚くべきは職員数が沖縄国際大学91名に対して、金沢工業大学233名で非常に多い。これは後の金沢の報告でも重要な意味を持つ。

次章では金沢工業大学、第3章では沖縄国際大学について報告と分析を行い、第4章でこれら二大学の視察を踏まえた総括を行う。視察はいずれも小森、藤澤、福田、白川が行った。金沢工業大学は2006年12月15日に学生部長藤本元啓氏にお話を伺い、学内の施設を見学させていただいた。沖縄国際大学は2006年12月20日に、渡辺春美氏の担当される「日本語表現法演習Ⅱ」に参加観察させていただいた。

(小森)

2. 金沢工業大学における初年次教育から学ぶ

(1) 金沢工業大学の初年次教育の特徴⁵⁾

金沢工業大学の教育目標は、「自ら考え行動する技術者の育成」であり、大学の教育方針としては、従来からよくある「大学で何が学べるか」から一步踏み込み、「学生が大学でなにができるようになるのか」を重視している。多様な学習歴の学生が多様な入試形態で入学してくることをふまえて、教育の質と成果を保障し、学生や保護者、社会に対する説明責任を負うことを意識的に実行すること。そのために必要なサポートは教職員一体となって取り組むことで「教育付加価値日本一」の大学を実現するという最終目標がここから生み出されてくる。

初年次教育の科目としては、大学教育適応関連科目群（修学基礎教育科目）、工学教育基礎科目群、高等学校復習科目群の三群構成になっており、この中でも特に、「修学基礎」、そして英語や理数教科の高等学校復習科目群が注目される。

大学教育適応関連科目群の中の「修学基礎」は他大学でのいわゆる「基礎ゼミ」にあたる科目で、レポートライティングに重点が置かれる。特に学生はその週にどのような勉強にどのぐらい時間を費やしたかを記した自己ポートフォリオを毎週作成する義務を負い、インターネットを通して修学アドバイザー（いわゆる担任の教員）に提出し、そのアドバイスを受ける。このシステムは、先に述べたように、平成18年度「特色GP」に採択され、教職員側が学生一人ひとりの動静を細かく把握し、ドロップアウトしそうな学生に対しても十分対処ができるだけの徹底した取り組みとなっている。ポートフォリオの提出が遅れたり、授業欠席が多くなりがちな学生に対しては、修学アドバイザーからカウンセリングを受けることになり、さらに専任の職員によるサポートが続けられる仕組みである。

また同じ授業科目群に「自然と人間」という科目があり、2泊3日の海洋合宿に参加して様々な活動を通して体験学習をする。ここにも経験を積んだ教員と職員が多数配置され、学生の共同生活を支える仕組みがある。

「復習科目群」の外国語や理数教科の科目は、「基礎教育センター」においてプログラムされたカリキュラムに従って自己学習を進める。教員が必ずセンターに詰めていて、いかなる学習相談にも応じる体制が確立しているので、学生は自分のペースで復習することができ、自分の弱点箇所を確認できるようになっている。また、同センターにおいては、日本語のレポートライティングをサポートする教員も配されており、レポートを仕上げるところまでの手順や表現の添削指導を受けることもできる。この基礎教育センターにおいては、教員は常に学生の相談を受けることができるように待機することが求められる。

金沢工業大学の教育に一貫して流れるのは、学生は「顧客」の立場であるという考え方である。教職員は、顧客としての学生の満足度を上げることに最大限の配慮をする必要がある。ということは、「主役」は学生であって、教職員は「脇役」にすぎないということになる。教職員には学生に対してほめるべきは大いに褒め、学生の潜在能力を引き出すサポートが要求される。また学生が教職員の所に来るのを「待つ」のではなく、より積極的に学生に「語りかける」姿勢に転換することが要求される。このシステムが完璧に出来上がっていて実践されていることがこの大学の「成功」といわれる要因であろう。

（２）金沢工業大学の初年次教育から学ぶべき点

まず、学生のグループワークを中心とした学習が徹底されているところである。そもそも技術者はグループで作業することが前提で、その中で自己を伸ばしていくことを要求される。同じことを大学で先取りして陶冶していくことは非常に望ましいことである。そのための環境づくりとして、「自然と人間」という授業科目が設置され、チームでこなす海洋トレーニングがある。あるいは「夢考房」を代表として、学生が自由にその発想を伸ばしていく場としての24時間開放の自習室の設置、またたとえば教室の楕円形の机の配置に至るまで、いつでもどこでもグループで相談をしやすい環境づくりが大学全体に一貫して流れている点である。実際に視察に訪れた際も、自習室や夢考房には人があふれ、自主的なグループワークの場が自然発生的に出現していたことが強く印象に残る。

次に、「自己ポートフォリオ」を初めとする自学自習システムの構築と相談窓口の多さも強調したい。特に理数系の授業科目においては、基礎の部分がきちんと身に付いていないと専門科目のレベルにはついていくことが難しくなる。諦めてドロップアウトする学生の多さを考え、その部分を学び直すことができる自主教材と、コンスタントな学習を続けていくことができるような環境づくりへの十分な配慮、そのための教職員からの励ましも含めたサポート体制が充実していることも注目すべき点である。そのための教員の献身的貢献も見逃せない。

さらに、人数の多さが際だつ職員の授業運営全般への積極的かつ建設的な関わり方にも注目したい。修学アドバイザーとの連携を図り、学生との連絡を取り合って退学者を減らすことに貢献するという面でも、「夢考房」での学生の取り組みに対して技術的にサポートをする面でも、さらに「自然と人間」の授業での海洋合宿でのサポートなど、単に側面で支えるという以上のサポート体制が目立つ。

最後に、もっとも重要な点は、初年次教育として授業内で行う部分を充実させていくとともに、授業外での学生の自由な活動を奨励し、集団の中に自らを位置づけていく姿勢を初年次から身につけることができるように、この一点に向けてすべての体制が組まれている点である。そして教職員はこの点に向けて職務を果たすことを要求されている。その意味で、我々の視察の際に応接して頂いた藤本元啓氏の「代わりはいくらでもいます」という言葉が我々の胸に強く響いたことを付け加えなければならない。(藤澤)

3. 沖縄国際大学に学ぶ初年次教育の課題としての居場所づくり

(1) 渡辺春美氏による「日本語表現法演習Ⅱ」実践の概要

本稿で分析の対象とする「日本語表現法演習Ⅱ」は、沖縄国際大学日本文化学科琉球文化コースの選択科目(教職必修/2単位)として、秋期1年生に配当されている授業である。2006年度は水曜1限(9:00~10:30)におかれていた。演習ではあるが100名を超える学生が受講していた。

ウェブ上で公開されていたシラバス⁶⁾によれば、「日本語表現法演習Ⅱ」のねらいは以下のよう

<授業のねらい>

- ・音声言語・文字言語による表現活動を単独で、あるいは共同で行うことを通して、自己を見つめ高めるとともに、論理的に思考し、説得力のある表現が出来るようにする
- ・言語のコミュニケーションとしての働きを認識し、その力を高めることで、人間的な関係を結び深めることができるようにする
- ・表現することに積極的に取り組み、親しむことで、言語表現主体としての自己を確立できるようにする

一つの授業においても学生たちの発達課題を意識した構想になっており、言語表現を追求する過程を通して、「自分づくり」「関係づくり」といった課題に迫ろうとしていることは興味深い。次に授業計画を見て見ることにしよう。

<授業計画>

- 1:オリエンテーション—『鬼慶良間』読み合わせ/『鬼慶良間』スタッフ決定
- 2:『鬼慶良間』読み合わせ及び係ごとの活動計画作成
- 3:『鬼慶良間』立ち稽古及び係ごとの活動
- 4~6:『鬼慶良間』通し稽古及び係ごとの活動
- 7~8:大学祭『鬼慶良間』公演Ⅰ、Ⅱ
- 9:『鬼慶良間』反省/構成詩群読の説明

- 10：構成詩群読班ごとの練習
- 11：構成詩群読班ごとの発表
- 12：小論文執筆の説明及び構想
- 13：班ごとの小論文相互評価及び班代表の推薦
- 14：小論文発表会
- 15：まとめ、評価、アンケート

この授業は大きく分けて、3つの部分で構成されていることがわかる。まず第一に、11月末に開催される大学祭において芝居『鬼慶良間』を上演することが目標として設定され、その準備が授業を中心に行われる。この芝居は、渡辺氏の前任者である遠藤庄治氏によって脚本が書かれたものであるが、内容は沖縄国際大学の対岸に浮かぶ慶良間諸島がもつ歴史、すなわち第二次世界大戦中の米軍との激戦をモチーフにしたものである。この芝居の上演は、数年来継続して実施されており、学生たちは「先輩の作品」を乗り越えることを目標にして取り組むことになる。上級生たちは、自分たちの作品への誇りを胸にしながら、後輩たちの出来栄に大きな関心を持っているという。地域の人たちもまた、毎年この芝居を楽しみにして大学祭に足を運んでくるという。すなわち、この授業は「タテ」と「ヨコ」の広がりをもった授業としての位置づけをすでにもっているのである。この授業が果たす、沖縄国際大学で学生生活を送ることに関するイニシエーションとしての役割は計り知れないものがあるだろう。

次に、中学2年生の国語教材として光村図書等で取り上げられ、なじみの深い作品である「木琴」（金井直）を題材とした構成詩の群読の発表が目標に設定され、その準備が授業を中心に行われる。この構成詩もまた先に触れた遠藤氏によって創作されたものであるが、この構成詩の群読に対して学生たちは自分たちなりに創造的に取り組むことになる。

上記2つの部分においては、主に言語を声に出して表現することに重きをおいた活動が構想されているが、最後の部分では、書くという表現を集団的に高めていくことをねらいとして、小論文執筆が行われる。十分考えられた、バランスの取れた授業計画であるということができよう。

（2）授業への参加を誘う評価—渡辺氏の授業の参与観察から

筆者たちは2006年12月20日に渡辺氏の授業を参観させていただいた。当日は第11回目の授業であり、グループごとによる構成詩の群読の発表が行われた。

われわれが授業が行われる教室に15分前に到着した際、すでに教室は熱気に包まれていた。いや、周囲の空き教室にもその熱気は波及していた。学生たちがそれぞれの班ごとに自主練習を繰り返していたからである。この授業の冒頭において渡辺氏もまた「教室が暑い」と言って学生たちの笑いを誘いながら、彼ら／彼女らの姿勢を高く評価し、発表への期待を語りかけていた。

本番での発表も、その熱気が冷めることなく行われた。どのグループも熱心に練習に取り組んできたことが聴衆に伝わってくるような群読であった。それだけではなく、群読の際の立ち位置も教室全体を一つの劇場に見立てているかのように考えられており、また効果音も学生たち自身

が工夫して準備し、効果的な演出がなされていた。それらのすべてを含めて、構成詩の群読が班ごとの一つの作品として上演されていた。

渡辺氏は学生たちの群読の発表に対し、その努力と工夫への肯定的な評価を与えつつ、「台詞のはじめの部分は高く、大きく話すこと」「周りの者と声を合わそうとするとどうしても声が小さくなるので、思い切って話すこと」といった技術的な指導も与えていた。他方で、遅刻してきた学生や途中でトイレに立った学生に、さらには発表中に私語を続けていた学生に対し「一つの足音が劇を壊すのだ」「しっかり聞くことが演技者を励ますのだ」と言いながら、非常に激しく怒りを表明していた。ここでの渡辺氏の指導が、単なる授業中のマナーを守ることを要求するようなものではなく、発表者の立場から要求を突きつけようとするものであることに注目しておきたい。こうすることで、彼は自分たちの活動をお互いに支え合うことが重要であることを、学生たちに教えようとしていたのである。

（３）初年次を通して追求する学生の居場所づくり

渡辺実践のなかに秘められている初年次教育の視点を引き出すならば、以下のような二つを挙げるができるであろう。

まず一つには、学習にグループで取り組むということである。構成詩の群読は１班１５人程度で７つの班に分かれて取り組まれていた。この班は「基礎演習」と呼ばれる１年生のゼミ形式の授業を元にして構成されている。学生たちはこの班に所属しながら、群読だけでなく小論文の執筆にも取り組むことになる。すなわち、複数の授業に対して、同じグループのメンバーで取り組むことができるように工夫されているのである。しかも、シラバスを見ても明らかなように、学習班で活動しながら学習を進めていくことをあらかじめ想定して、授業内容が構想されている。シラバスで示された「人間的な関係を結び深めること」という目標のレベルにおいてだけではなく、授業の内容や方法のレベルにおいても、学生の共同を導き出せるように構想されているのである。さらには、上述した渡辺氏による授業規律の指導場面に典型的に表れているように、評価活動に際しても、学生たちの関係性の育成を主眼に据えて行われているのである。

二つには、授業に向けて自主練習を行うことが学生たちにとって当たり前のこととして感じられるような大学文化を醸成しようとしていることである。このことは、劇や群読のように、練習がどうしても必要な活動が授業計画に組み込まれているだけではなく、一つの授業を基礎にして大学祭へ参加することも授業計画に組み込まれているところに表れている。しかも、この授業で取り組まれる『鬼慶良間』の劇は、学生たちに「伝統行事」として認知されているだけではなく、地域の方々もまた毎年の上演を楽しみにしているという。こうしたさまざまな仕掛けが学生たちを自主練習へと誘うのであり、学生たちはその営みのなかで関係性を育み、深めていくことができるのである。

こうした取り組みのなかで育まれる関係性について、私たちは二つのことを押さえておく必要がある。まず一つには、その関係性の質である。『鬼慶良間』上演へといった過程のなかで生み出される学生たちの関係性は、互いを気遣い、自分が傷つかないように振舞う関係性にとどまる

ことはできない。芝居の成功という共通の目標に向かって討論を繰り返しながら取り組む過程のなかで、相互批判さえ辞さない関係性が生み出されることは想像に難くない。この関係性が学生たちの今後において非常に重要な役割を果たしうるのは、改めて指摘するまでもなからう。二つには、この取り組みの背後に、沖縄国際大学が拠って立つ地域性が据えられていることである。この地域性を学生たちが自分たちなりに意味づけ、受けとめることが、沖縄国際大学で学ぶことの意味と意義とを彼ら／彼女らに伝えていくことになる。こうした、ともに苦勞を乗り越えた体験と、ある種のイニシエーションを可能にする文化性が背後にあるからこそ、学生たちはそれぞれのアイデンティティのなかに共通部分を育み、そのことが彼らの仲間意識を深めていくことにもつながっていくのである。⁷⁾

これらのことは、学生たちの居場所づくりが初年次教育の重要な課題の一つとしてあることを私たちに示唆している。しかもその居場所づくりを授業を通して行うことが重要であり、またそれが可能でもあることを、渡辺実践は私たちに示している。(福田)

4. 二つの大学から何を学ぶべきか、否か？

(1) 「成功」の理由

金沢工業大学・沖縄国際大学それぞれの取り組みに関しては既に藤澤・福田によって検討が加えられており、これ以上言及しても屋上屋を架すことになる。また、概要のレクチャーを受けた金沢工業大学の場合と、実際に授業を見学し、授業担当者からお話をうかがった沖縄国際大学の場合と、視察の仕方が異なり、簡単にまとめることにも無理があることは十分認識するところである。ただ、両大学の取り組みに関して共通点を見出すという方法によって、筆者なりに両大学の「成功」が導き出された理由と考えられる点を指摘し、両大学の取り組みから何を学べばよいのか考えてみたいと思う。

まず第一点目として指摘できるのは、両大学とも集団（グループ）での学びが実現されているということである。金沢工業大学の場合、しばしば取り上げられる夢考房プロジェクトをはじめとして、大学全体でいろいろな場面において学生の集団による学びの仕掛けが取り入れられている。一方、沖縄国際大学の「日本語表現演習Ⅱ」の中でも、学園祭における劇『鬼慶良間』の上演と、今回の視察で幸運にも見学することができたグループ毎の詩の群読など、その大きな目玉としてグループによる学びが組み込まれていた。

次に、両大学とも授業時間外での学びが存在していることを第二点目として指摘したい。金沢工業大学では、夢考房・自習室が24時間開かれ、学生がいつでも自由に学ぶことが可能となっており、学生の授業時間外の学びが実現される環境が整備されている。沖縄国際大学の「日本語表現演習Ⅱ」においても、学園祭で『鬼慶良間』が上演されるためには、授業時間内での取り組みだけでは当然不可能であって、自主練習という形で受講生による授業時間外での自主的な学びが実現されているであろう。そしてその推測を裏付けるように、3章で福田も述べた通り、沖縄国際大学の視察当日、1時限目の授業開始前に、群読を行うグループがそれぞれ空き教室などを利

用して自主練習を繰り返していた姿はたいへん印象に残っている。

第三点目として指摘したいのは、初年次教育のカリキュラムの核に、誰もが担当できる科目が置かれているという点である。沖縄国際大学の「日本語表現演習Ⅱ」は受講生が100名を越え、しかも演習という授業形態である。このような条件の科目を誰もが担当できるとは容易には想像し難い。しかしながら科目担当者は、授業内容は前任者の「遺産」であり、自分以外でもこの科目を担当することは可能である、と事もなくおっしゃった。金沢工業大学の場合、「修学基礎」という科目がそれに当たるが、「代わりはいくらでもいます」という言葉が象徴するように、それはシステムに則ることで誰もが担当可能な科目として設定されていた。もちろんそれが果たされるには、学生ひとりひとりが作成するポートフォリオへのこまめな対応をはじめとして、担当教員の相当な負担がなされていることは容易に推測することができた。

沖縄国際大学の「日本語表現演習Ⅱ」、金沢工業大学の「修学基礎」、両科目とも授業内容の精選、あるいは授業方法の確立などによって、科目の「完成度」が高められることで、誰もが担当可能な科目となっていることは注目すべきであろう。こうした誰もが担当者となれる核となる科目を中心としてカリキュラムが考えられている点はとりわけ重要に思われる。

(2) 本学初年次教育への提言

翻って「初年次教育の目標は何か」という点について考えてみるならば、それは、単純な読み・書きやプレゼンテーション能力の涵養にとどまるものではないはずである。この間のFプロの取り組みから実感したことなどから考えると、冒頭にもあるように、一つには大学4年間の学習意欲の喚起にあるのではないかと考える。この点を踏まえて、両大学の取り組みを参考にして本学の初年次教育に対して、ひとまず次の二点を提案したい。

第一点目は、「場」の提供である。

ここで言う「場」には、いくつかの意味が含まれている。一つは、文字通りの場、すなわち物理的な場所の意味である。本学、とりわけ小阪キャンパスにおいては、講義の無い時間に学生が集う場所が決定的に不足していることは誰の目にも明らかであろう。金沢工業大学の夢考房や自習室は望むべくもないが、学生が授業外学習を行い得るようなスペース、学生が腰を下ろして会話を交わすことが可能となるようなスペースの確保が望まれる。またそこまでの大幅な校舎利用の変更を伴わずとも、現在のような机や椅子ではなく、着席すれば自然とグループが出来上がるような楕円形のテーブルの導入や、教員を目指す学生が中学・高校の教室を実感できるような教室を一室設けるといった場の整備であれば、予算措置さえなされるならば比較的容易に着手可能な場の提供になり得るように思われる。

「場」にはもう一つ、学生によるグループ、あるいは授業時間外での学びが実現できるようにするための、学生相互の関係性を結べる場という意味も含ませて考えたい。⁸⁾ そうした場をどれだけ提供できるか、がここで重要視したいポイントである。その観点からすると、2006年度に学生課(現学生支援課)が提案した、学生の活動に対して資金援助を行う「樟蔭活き活きプロジェクト」は、近年の本学の取り組みの中では注目すべき試みと評価できるように思われる。もちろん

ここで言う学生相互の関係性とは、福田が言う、時には相互批判も可能となるような関係を指していることは、あえて強調するまでもない。

提案の第二点目は、初年次教育の核となる科目を設定することである。例えば、金沢工業大学の場合は「修学基礎」、沖縄国際大学の場合は「日本語表現演習Ⅱ」という科目が存在していた。既に指摘したところであるが、こうした核となる科目を中心として、大学4年間の基礎となる初年次教育のカリキュラムを考案すべきではないだろうか。手っ取り早く既存の科目の寄せ集めで解決しようとする安易な方法ではなく、核となる科目を中心に有機的連関のうちに他の科目を配置したカリキュラムが必要とされているように思われる。その意味では2007年度的大幅な教養教育科目の改変によって消滅してしまったが、設置時の「基礎ゼミ」の理想⁹⁾を継承するような科目こそが必要とされていると考える。

なお、ここで言う核となる科目の条件としては、少なくとも次の三つを指摘したい。まず一つは、核となる以上、教員誰もが担当可能な内容の科目であることが必要とされよう。二つめの条件は、その科目の目標の一つに、大学が居場所となるような学生相互の関係性の構築が掲げられなければならない。三つめの条件は、その科目が「達成感」を実感できる仕掛けを有していることが求められていると考える。沖縄国際大学の「日本語表現演習Ⅱ」の場合には、『鬼慶良間』を学園祭で上演することで受講生が達成感を実感するであろうことは容易に理解されるのであって、その達成感が基となって群読の完成へと導かれていると推測される。金沢工業大学の場合、「修学基礎」において学生に求められるポートフォリオへの記入は、その評価は別として、1年間それを継続すればある種一定の達成感を獲得することができることは間違いないところである。

教育効果を上げるため、個人的に工夫、努力を行っている教員は、本学にも多数存在するであろう。また、新しい教養教育科目として導入された「教養ゼミナール」¹⁰⁾の担当教員の方々の取り組みにも大いに期待したい。そこでの成果が大学全体に還元されることで、初年次教育の内容がより豊かなものとなっていくであろうと確信している。

とは言うものの個人のレベルで対応しきれない問題が立ちだかっていることは紛れもない現実である。組織的な取り組みが必要とされる段階に立ち至っていることも実感されるところである。そうした組織的な取り組みが、突然どこからか命じられてそれに帳尻合わせをするような取り組みであってよいはずがない。2006年度末に本学で設置が決められた「教育開発機構」の現れ方は、率直に言って問題が無かったとは言えない。ただ、我々Fプロがここ3年の間見つめてきた本学の現状に鑑みるならば、こうした組織設置の必然性があることも認識するところである。とするならば、現実的な問題として「教育開発機構」の今後の運営、活動の内容こそが重要となつてこよう。¹¹⁾ 基本的に有志によるFプロの活動と「教育開発機構」との接点の模索は、Fプロの今後の課題である。

(白川)

【註】

- 1) http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/07073002/001.htm
- 2) 「初年次教育」の同種の用語として「リメディアル（補習）教育」「導入教育」「キャリア教育」などがある。例えば「初年次教育」と「補習教育」は別物であると指摘される（濱名(2006)、山田(2007)）。しかし日本語や英語などについては、大学1年生で学ぶ学習内容と本来高校までで修得すべき学習内容を区別することは現実には難しい。「キャリア教育」は、社会人としての基礎的スキルが初年次教育としての大学入門的内容と重なる部分が多いが、対象学年の点で1年次のみに限定された教育ではないであろう。また、プレアドミッション教育（入学前準備教育）も初年次教育の一部であるとする考え方もある。これらの用語の多様さは、各大学で必要とされる教育が内容的には重なり合う部分が多いものの、個別の目的や対象・時期などによりズレがあることを示している。
- 3) 「教授者中心から学習者中心へ」という発想は、学習者の自律(learner autonomy)をめざす self-access の考え方においても重要である。藤澤・小森(2007)を参照。
- 4) このアンケートは河合塾が2007年に高校進路指導の教員を対象に実施したアンケートによるものである。質問は「偏差値はあまり意識しないが学生への面倒見がよいと感じる大学」。回答数586のうち1位の金沢工業大学は93、2位の名古屋商科大学は32である。
- 5) 第2章の執筆に当たっては、金沢工業大学の学生部長藤本元啓氏ご提供の資料、並びに藤本・西村(2006)を参考にしている。
- 6) <http://www.okiu.ac.jp/gakumu/kogigaiyo/2006mokuji59.htm>
なお、現在では2006年度シラバスのWeb上での公開はされていない。
- 7) 翻って、大阪樟蔭女子大学においてイニシエーションを可能にする地域性ないし地域的な文化的背景をどのように構想するかは、大きな課題の一つとして挙げられると思われる。
- 8) 福田他(2006) pp.183-186、白川他(2007) pp.165-166.を参照。
- 9) 前掲注8) 白川他(2007) pp.157-158を参照。
- 10) 2007年度大学案内によれば、「春学期では、高校以前の教育と大学教育との接続を意識し、『読む』『書く』『調べる』『発表する』能力を育成。(中略)大学での学びの基礎を養います。」「秋学期の授業では、(中略)授業でディベートやディスカッションを行い、『話す』『聞く』『考える』チカラを総合的に養成し、コミュニケーション能力を磨きます」と紹介されており、これが達成されるならば、本学の初年次教育は大きく前進するものとなるだろう。ただ、「教養ゼミナール」は、現行のカリキュラムでは必修ではない。この科目を大学全体のカリキュラムの中にどのように位置付けて行くかは、今後の本学の初年次教育における大きな課題として残されている。
- 11) 2007年5月から正式に活動が開始された。

【参考文献】

- 白川哲郎他（2007）「大阪樟蔭女子大学における初年次教育改革の方向性と課題（Ⅰ）」『大阪樟蔭女子大学（学芸学部）論集』第44号、pp.157-171.
- 濱名篤（2006）「初年次教育の現状と課題 — 「移行」問題を中心に」（中央教育審議会大学分科会大学教育部会（配付資料））
- 福田敦志他（2006）「大阪樟蔭女子大学における授業改善の可能性と課題」『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』第43号、pp.179-191.
- 藤澤良行・小森道彦（2007）「Developing Learner Autonomy — 大阪樟蔭女子大学における Self-Access Center 構築のために」『大阪樟蔭女子大学（学芸学部）論集』第44号、pp.7-18.
- 藤本元啓・西村秀雄（2006）「金沢工業大学」（濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育 — 歴史・理論・実践と世界の動向』（丸善、2006）所収、pp.135-147.）
- 山田剛史（2007）「学生の視点を踏まえた初年次教育の展開 — 多様化を見据えた教育改革の組織化に向けて」『島根大学生涯学習教育センター研究紀要』第5号、pp.15-29.

【付記】

今回の視察を快く引き受けてくださった金沢工業大学の藤本元啓先生、山岸知幸先生、沖縄国際大学の渡辺春美先生、三村和則先生に深く感謝いたします。

（本稿の作成のために、大阪樟蔭女子大学平成18～19年度特別研究助成費の一部を使用した。）